

『そうだ東京、行こう。』

2023 年 1 月 9 日

決定稿

学籍番号 NE211021

氏名 石川 怜奈

「登場人物」

橋下 茜（18 歳）

京都出身、京都育ちのギリギリ高校三年生。今までまともに京都の外に出たことがないが、大学が東京の音楽科に決まり上京することになる。不安や緊張にも負けないメンタルはあるものの、自分の母親にはとても敵わない。

橋下 翠（50 代）

茜の母。天真爛漫でパワーに溢れている。いつも適当なことをよく言っているが、憎めない性格で寧ろ元気を分けてもらえるような人気者である。過去の出来事（？）を語る人物。

父（50 代）

茜の父。大学で翠と出会った。物語では名前のみ。

○実家の玄関（早朝…5時頃）

靴紐を結び、大きなリュックを背負う茜。

背後から翠が話しかける。

翠「いつでも帰っといで」

扉を開け、少し間を置いてから茜が振り返る。

茜「うん、行ってくる」

茜を強く抱きしめて囁く翠。

翠「おはようおかえりやす」

茜は少し悲しげに微笑む。扉の閉まる音。

○京都駅のホーム

茜がスマホで『新幹線 乗り方』と検索している。

新幹線が到着し、意気込んで乗り込む。

○新幹線内

慌ただしくペコペコと周りに頭を下げながら通路を進み、空席に座る。

一呼吸して、大学の校章入りのクリアファイルをリュックから取り出す。

目を擦りつつ中に入った合格証や赤印で埋められた楽譜等を後ろに送り、途中で手を止める。

そこには特別試験の題と、それに関する概要や評価項目の文字。

スマホのリマインダーを開き、引越しに関する今日のタスクに混ざった『重要…明日13時 試験』という赤色が鮮明に映る。

弱々しく深呼吸し、手を握り直す。

○バス内

資料を抱え込んだまま爆睡している

茜。

○下宿先の外

道路を歩く茜。スマホの道順案内が終了し、茜がアパートに入っていく。

○下宿先の部屋

棚に楽譜や合唱コンの写真が並ぶ。中身の片付いた段ボールを積み、部屋の端に雑に放るひとりぼっちの茜。デイベッドにどさっと座り伸びをする。

茜「……ふう」

時計の音が響き、ちらりと壁掛けの時計を見る。

11時53分。

茜「そろそろ食べるか」

目の前の机にあるビニール袋からおにぎりを取り、ついでにテレビを付ける。

その袋の横に、新幹線で見ていた資料とクリアファイル。

テレビ「お昼以降の東京の天気をお伝えし……」

チャンネルをいくつか変える。バラエティ番組の歓声やCMが聞こえる。

茜（M）「知らへん番組だらけや」

おにぎりの最後の一口を押し込もうと少し首を持ち上げる。

うつすらと聞こえる鉄道会社の旅行

CMの曲（my favorite things）。

茜が顔を戻しテレビが映る。

テレビ「そうだ京都、行こう」

茜、部屋から突然消える。

○実家のリビング

茜が実家のソファに現れる。

掃除機を持って通過する翠。
お互い、しばしの沈黙と啞然。

翠「おかえり、どないしたの」
茜「……??」

× × ×
二人、ソファに座っている。
謎現象を説明している茜。

茜「おにぎりはいつもうちが部活で食べ
とったやつだし」

翠「そんだけ？」

茜「うん、CM以外心当たりがあらへ
ん」

翠「ふうむ」
探偵のように考える翠。

急に茜に視線を戻し、噛み締めて一言。
翠「これが、音楽のチカラなのね」

茜「は？」

翠は言葉を弾ませながら続ける。

翠「よう言うやん、音楽テレビとかで」
茜「その音楽のチカラって物理的なものと違うやろが！もったこう、歌聴いて生きる希望を手に入れるとか、合唱で人と人を繋ぐとか」
翠「おお、流石声楽科の例えやな」
顔を手で覆い、ぐあーと唸る茜。
茜「なんで母はこんな平然としていられるのか」
キョトンとしている翠。

翠「でも茜、そのCMの曲名知ってる
か？」

茜が顔を上げる。

茜「知らないけど」

翠「それ、『my favorite things』って
ゆう曲なんや。『私のお気に入り』っ
てな」

茜「へえ、なんで知ってんの」
翠がよくぞ聞いてくれたと茜をキリッ
ッと見つめる。
ちよつと引く茜。

翠「私にも茜と同じような時期があつて

な……」

茜（M）「え、なんか始まった？」

翠がキラキラとしたオーラに包まれる。

翠「もう十年も前かしら、私は東京のお嬢様学校に通うことが決まって」

口調を変え、悲しげに頬に左手を添える翠。

翠「ずっと、心細かった」

茜「あの」

茜を無視して続ける。

翠「怖い人も沢山いる。でもね、その時に『my favorite things』に出会ったの。」

茜（M）「声が届いていない」

ミュージカルのように手を上に伸ばす翠。

翠「私のお気に入り、私の生まれた京都をいつも思い出させてくれた。その曲に勇気を貰ったの……」

茜「お母さん！」

痺れを切らして声をあげる茜。

翠が我に返って茜を見る。

翠「あ、はい」

茜「お母さんの大学北海道の農業大学だから、十年前って所から嘘だから」

翠「そうだったかしら、でも不安だったのよ」

茜「初日から牛に美味しそうって言ったお母さんが怖いエピソードならお父さんから聞いた」

お母さんの部分を強調する茜。

翠「う、うふふ」

恥ずかしげに頭を掻く翠。

茜がやれやれと手を動かす。

茜「結局どこで知ったの」

翠「なんかのCM特集サイト」

茜「思ってた以上に風情が無い」

翠「元々ミュージカル映画の曲だからね、私のお母さんがよく聴いてて」

茜「なるほどね」

頷く茜。

翠「でも、良かった」

翠がにこりと茜に笑いかける。

不思議そうに首を傾げる茜。

翠「あんた、行く時ずっと表情硬かったから。流石の茜でも不安やったんやな
って」

茜「えっ、そうやったの？」

茜は目を見開く。

翠「だからきくと、音楽のチカラがこう
やって励ましてくれたんやなって」

茜は恥ずかしそうに笑う。

茜「う、うるさいなあ、もう！」

翠「ふふ、いつもの茜やな」

翠が愛おしそうに茜を撫でる。

茜「……お母さん、私頑張んで。頑張っ
てお母さんみたいに元気をみんなに届
けられるように」

翠「うん、楽しみにしてるな！」

笑いながら抱きしめ合う二人。

そこへ12時を知らせる時計のチャ
イムが響く。

茜「……あ」

急に動揺する茜に、疑問を浮かべる翠。

翠「ど、どないしたの」

茜「この後すぐ、歌の特別試験がある」

翠「あっ、今日、やったか……何時か
ら？」

茜「13時」

翠が口をぱくぱくさせる。

茜「家から東京、速くて3時間」

一周回って冷静に話す茜。

翠「大学に連絡……」

茜「音楽のチカラを使うしかあらへん」

翠「茜!？」

先程とは真逆に、翠が茜を疑う。

茜「だって、そうするしかあらへんや
ん! 大学に実家にワープしたから行け
ません、なんて言い訳できひんで」

翠「確かに」

茜「ええい、ままよ！なんか東京に戻れ
そうな曲を探せ！」

翠「御意！」

切り替えが早い翠、急に楽しそうに返
事をする。

茜「これならどう」

茜が動画サイトを開き、『木綿のハン
カチーフ』を再生する。

翠「どうやろう、旅立てそう？」

茜「ま、まだ分からへん」

一番が終わるのをじっと待つ二人。

茜「……」

翠「……」

茜「飛べへんのかい！」

ばん、と強く膝を叩く茜。

翠「あんた恋人おったっけ」

茜「いーひんなあ」

翠「独身には無理なんとちがう？」

茜「辛辣すぎひんか音楽のチカラ！」

翠「大学でアーバンな人と付き合えると
ええなあ」

茜「やかましいわ、次、次！お母さんな
んか良いの知らへんの？」

翠「お母さん令和生まれやからなあ」

茜「安心して、曲の時代関係ないし余裕
で昭和の人間や」

翠「酷いわ！あんたこそ最初から昭和の
曲なおかしなない？」

茜「令和の曲はどれもガンガン喧しいし
速すぎて歌詞聞こえん」

翠「年寄りか」

茜「あんたに言われたないわ！」

終始唸る二人。

ふと顔をパツとあげる翠。

翠「……あ、ええのあるやん！」

茜「ほんまか！？」

翠がお気に入りのプレイリストを漁
り、画面をタップする。

翠「……」

ごくりと唾を飲む茜。
次の瞬間、茜が実家から消える。

○下宿先の部屋

どさつとソファに投げられる音。
机の資料が風圧で少しばらつく。

茜「……帰ってこられた？」

ゆつくりと部屋を見渡す茜。

茜「良かった……」

次の瞬間、目の端に翠の姿が映る。

翠「東京、来てもうたう」

翠が照れたように話す。

茜「何故だ、何故そうなる我が母よ」

翠「音楽のチカラうって二人でもいけるんやなあ」

茜「謎現象より謎な母親だよ、怖いよ」

翠「やー、おらも東京さ来ちまった！」

翠の手に持った携帯から『俺ら東京さ行くだ』が聞こえる。

茜「原因どう考えてもそれやん！」

茜「ぜえぜえと突っ込む茜。」

翠「それより、時間は間に合いそう？」

茜が時計を見る。12時16分。

茜「大学近いし、余裕そう」

翠「へー、好立地やな！部屋も広いし」

茜「そこ！？」

流石に呆れてため息をつく茜。

茜「でも試験やし、早めに出た方がええな」

翠「そうかー、寂しいな」

少し俯く翠。

その様子を見て、茜はふふつと笑う。

茜「私帰ってくるまでここにおいたら？」

夕方には戻るし」

翠を気遣う優しい茜の声色。

翠「折角の東京巡り、茜と行きたかったわー」

携帯で『東京 美味しいランチ』を検索する翠。

翠「あ、ここ良さそう」

茜「もう突っ込まへんで」

翠「でも私お金持ってないし、行くなら
ディナーやな」

茜「この母親払わす気満々や」

茜の携帯から12時20分のアラームが鳴る。

茜「時間やな」

机の上の資料を束ねる茜。

翠「よし行くぞう！（吉幾三）」

茜「寒いわ！」

二人、笑いが溢れる。

○下宿先の玄関

靴紐を結び、今度は小さなリュックを
背負う茜。

茜「ほな、また後でな」

翠「おはようおかえりやす、頑張っ
てな！」

茜「おう！」

扉を力強く開ける音。

茜はいつもの笑顔で大学へと向かっ
ていった。

——おわり
(ペラ31枚)